

※本作品は二〇〇九年発行の「八一騒動」(絶版)を基に大幅に改編している。

空には雲一つ見られない。

星々が瞬き、真円を描いた月が煌々と輝いていた。冬の夜の空気は身を切り刻むほどの寒さである。

柔らかな月明かりが投げかけられている通りに人影は全くなかった。猫の子一匹すらない。街燈も点いておらず、どのビルの窓からも例外なく明かりは漏れていない。

廃棄区画であった。

目を閉じて耳を澄ませば、街の喧騒が今でも聞こえてくるようであった。

しかし、その喧騒の作り主達はどうの昔に去ってしまった。その代わりに、今は不気味なまでの静寂がそこには横たわっている。後はゆっくりと朽ち果てるだけの街が広がっている。

その通りを何かが駆け抜ける。

見てくれは小型飛行機であった。空中を疾走するその飛翔体は急停止し、無機質に赤く輝く目で辺りの様子を窺う。にわかには気が震え、衝撃波が通りを駆け抜けたかと思うと、

真横から砲弾が飛んできた。だが、瞬時に展開されたシールドがそれを防ぐ。

爆発音が大気を震わせ、深夜の死んだ街に響き渡る。そして、煙がもうもうと立ち込めた。

その煙幕から先程の機械が姿を現した。装甲が多少煤けたものの健在である。

その機械、いや兵器に人が乗っている様子はない——自律兵器である。それは攻撃してきた主を割り当て自動的に反撃する。その自律兵器から、光弾が立て続けにいくつも発射せられた。

橙色の軌跡の先に目標は見えなかったが、光弾は確かな手応えを以て爆発する。光学的な迷彩により不可視になっていた装甲車輛が現れた。当然、大破だ。

目標の撃滅を確認した自律兵器は次の獲物を求めて動き出した。

「N1、T3を撃破」

「N4、T6およびT7と交戦中です」

部屋は薄暗い。スクリーンがいくつも並び、戦闘が中継されている。

「試作機が優勢だな」

「三十分も経てば決着するだろうな」

二人の男が映し出されている映像を注意深く見守っている。

廃棄区画での夜間演習。大規模な市街戦演習をするには、廃棄区画はもってこいであった。当然、演習区域は迂闊に民間人が立ち入りができないような措置が取られる。

「そう言えば、彼の姿が見えないが……」

思い出したかのように一人の将校が室内を見廻しながら言う。そこそこ広い室内であるが演習責任者である将校、オペレータや主だった技術者達が詰めており狭苦しく感じる。

「興味が無いそうだな」

その言葉に彼は苦虫を噛み潰したかのような表情になり、

「いいご身分だな」

「ですが、彼がいなければここまでできませんでした」

将校の会話に口を挟んだのは技術者だ。

「自分としては、独力でできなかつたのは悔しい所ですが」

苦笑しながら付け加えた。

「能力は認めるが、どうも彼は信用できない」

そう吐き棄てた彼は再びモニターを見据える。

兵器は計算どおりの性能を発揮し、ターゲットを次々と撃破していく。

「待て、あれ、おかしいぞ」

突然、技術者の一人が声を上げた。一番、右下のモニターに映っている試作機の様子が

おかしい。ふらつきながら飛行している。

モニタリングしている技術者の顔がさっと青ざめた。

「暴走している？」

にわかには室内が騒がしくなる。

「このまま行くと市街地だ！」

「止められないのか」

一人の将校が叫び、もう一人が淡々と言う。コンソールを忙しく叩くオペレータが苦悶の表情を浮かべた。

「強制停止コマンドを送りましたが、AIがそれを拒否しました」

「もう一度、送るんだ！」

将校は声を荒らげて命令する。オペレータがコンソールを素早く叩いて、コマンドを再送信。オペレータは頼むという感じの表情になるが、スクリーンにはエラーメッセージが空しく表示された。

もう一人の将校が大きく舌打ちする。AIの暴走か、面倒だなといわんばかりの面持ちだ。

「どうすればいい？」

そう技術者の一人に質問する。質問された彼は慄き上擦った声で、

「停止コマンドが駄目なら、破壊するしかありません」

決断は一瞬であった。

将校は無言で頭を振るとオペレータに向き直る。

「破壊だ。待機している部隊にそう命じろ」

彼は淡々と言う。

「し、市街地の近くですか？」

オペレータが不安めいた表情で言うも、彼はぎろりと睨め付けて、

「他に方法はないだろう」

と抑揚のない声で言う。オペレータは縮こまったように「諒解」と復唱し、マイクに向かって命令を滔々と発した。

だが、その命令は無駄であった。破壊する手間は省けたのである。

突如として、その自律兵器は自爆した。スクリーンが白くなつたかと思うと、爆煙が立ち昇る映像が映し出されたのである。

「状況中止する！ 直ちに——」

耳障りなアラーム音が響いている。

その警戒音に添えられるように足音が響いた。

それほど広くはない船内の無骨な通路をバリアジャケット姿のフェイト・テストロツサ・ハラウンが駆け抜けていった。十数人の武装局員がそれに続いていく。

彼女らが向かった先は船倉であった。

次元航行貨物船プリマスから救難信号が発せられたのは、およそ一時間前のことである。——船倉にて魔力爆発が発生した。消火不能。

周辺空間を巡廻中であったL級艦船オスティアは現場に急行した。到着した艦船が見たそれは横腹から盛大な火焰を吹き上げるプリマスの姿である。

既に乗員の大半が救命艇に避難しており、直ちに収容作業が開始せられたのである。

サーチャーによると、船倉に巨大な魔力源が見つかっている。それこそが魔力爆発の原因であった。

船倉の入口からは容赦なく黒煙が吐き出されていた。それとともに熱気が伝わってくる。バリアジャケットを纏っている上からでも感じるほどの強力なものである。

その熱気を受けて、フェイトはその端正な顔立ちを思わず醜く歪める。

『こちら、突入隊長ハラウンです。現在船倉前。消防艇の状況はどうですか』

『こちら、消防艇です。放水準備中です』

『放水準備中、諒解です』

放水がされるまでもう少し時間は掛かりそうであった。フェイトは船倉の奥へと視線を移した。中の様子はここからでは窺うことはできない。

本来、船舶火災の類は外部から消防艇による外部からの消火が専らだ。現にオステイアに格納されている消防艇が既に外に出ており、放水準備を始めている。わざわざ危険を冒してまで突入することはない。

だが、今回は事情が違った。船長より聞かされた話によると、消火活動に向かった船員二名と聯絡れんらくが取れていないと言う。救助のための突入部隊であった。

煙により視界が全く効かない状況で、要救助者の姿を窺い知ることがは無理な相談であった。

事前にサーチャーを飛ばしたが、魔力素の濃度異状により、船倉の状態の詳細は掴めていない。生存はおそらくしているという曖昧な情報しか得られていない。

外からの放水を悠長に待ってられるか。しかしながら、火勢がまだ強いうちに突入するかどうかは判断しかねる。バリアジャケットが耐火仕様と言えども、高熱の空間の中に長時間居られない。自分達の身を危険に晒すわけにもいかず、二次遭難は避けねばならない。

それらを考慮しつつ、一刻も早く要救助者の救助活動に取りかからねばならない。

フェイトは天井を見遣る。動作しているはずのスプリンクラーが動作していなかった。これが消火不能に陥った最大の原因であることは火を見るより明らかである。

スプリンクラーは自動で動作しないときでも、手動で動かすことはできる仕様になっている。船内・船外から両方で消火活動を進めていけば、一気に火災は鎮火できるであろう。『こちら、突入隊のハラオウンです。船倉内のスプリンクラー動作しておりません。中の要救助者は不明。放水準備急いでください』

『こちら、消防艇です、放水開始まで後三分です』

フェイトは眉間に皺を寄せた。三分。たかが三分と言えど要救助者の命を左右しかねない時間である。

「アダー軍曹、スプリンクラー動作弁の遠隔操作はどう？」

アダー技術曹は頭を振って、その場に似つかわない穏やかな声で応えた。

「無理なようです。実行コマンドを何回か送っていますが、応答なしです。恐らくは通信ケーブルが火災のため断線しているようです」

そこでアダーは言葉を切り、フェイトに端末の画面を見せながら、

「ですから直接操作しなければなりません。そのスプリンクラー動作弁ですが、直近のものには船倉の第一区画の左壁側。つまり入口に入ってから二百メートルのところにあります」  
すぐ近くにある。幸いそこには火の手は廻っていない。



『突入隊、ハラウオウンです。船倉のスプリンクラーの動作機は船倉口より二百メートルのところにあることが判明。当初の予定を変更し、外部からの放水開始前に船倉に入り、それを動作させることを提案します』

艦船に待機している提督に提案した。

『提案、諒承する』

少しの間があり、諒承がなされた。

フェイトは後ろに控えている隊員達に向き直った。

「総員、火災防護装備をもう一度確認！」

耐火・耐熱用のバリアジャケットが装着されているかを確認する。火災現場の基本だ。

装備を確認した隊員から、次々と問題なしと返ってくる。フェイトは一頻り大きく頷いて、

「これより、船倉に突入します。バンクス三尉とトールマン軍曹はスプリンクラーを動作させてください、ロッド軍曹達は要救助者達の救出を。危険を感じたら、私の判断を待たずに直ちに退避してください」

フェイトの命令に局員達が「諒解」と威勢良く応じ、炎が蹂躪したる内部へと突入した。内部へと入ると、熱と煙が容赦なく襲いかかる。耐火性の効果を付与したバリアジャケットでなければ、瞬く間に大火傷であろう。コンテナが規則正しく並んでいるが、炎に包ま

れたコンテナは熱で歪んでいた。煙が天井を這うようにして覆い、壁伝いに降りている光景が見られた。

入口附近のコンテナには火が廻っていない。廻り始めたら救助の途中であっても撤退である。

《温度上昇、やや急です。視界やや不良です》

バルディッシュが状況を伝え、バリアジャケットへの魔力配分をさらに強化し、襲い掛かる熱を少しでも和らげる。

フェイトは火災の原因——魔力源——を探した。

激烈な紅の中に一際場違いなものがあつた。紫色に煌く結晶が炎の中に厳然とある。魔力結晶だ。周辺にはコンテナの破片と同載せられていた物品で散乱している。

「魔力反応の源はあれと見て、間違いありません」

アダー技術曹が指摘した。彼が覗き込んでいる端末の画面にはマジカルグラフィイーが映し出されており、強力な魔力源の存在を傍証していた。

だが、それは炎の中にあり、近附くことは到底無理であつた。周囲のコンテナの数多くが炎に包まれており、遠巻きで眺めることしかできない。

遠くで何か爆ぜる音がした。コンテナの積荷が爆発したのだ。コンテナ自体は耐火性とはいえ、中身は可燃物である。爆発物があるとは聞いていないが、何分大量に積みこむ

となると、その辺の検査もおざりになる。

『こちら、救助班のロッドです。要救助者を確認。しかし、炎のため救助はやや難しい状況です』

『諒解しました』

ロッドからの報告があった。多少の炎なら、飛行魔法を使って一気に抜けるという手もありである。ただ、帰りは要救助者を連れてということになるから、行きは良くても帰りは無理という状況になるのだ。

一際、大きな爆発音が鼓膜を震わせた。爆発物を積んでいたのか。それとともに異臭が鼻梁をついた。塗料か何かの類だ。

この船は本当に機械類が中心に運んでいるのだろうか。

スプリンクラー動作はまだかと祈っていると、小気味よい音とともにスプリンクラーからの放水が始まった。

『バンクスです。スプリンクラー動作弁解放しました』

『諒解、ご苦労様です』

『こちら、消防艇です。放水開始します。目標、第一区画中央。附近からは直ちに退避してください』

『放水開始ならびに退避諒解』

目標地点は火災の発生源。つまりは魔力結晶が確認されている附近である。フェイト達は直ちにそこから避難した。

土砂降りを思わせる大きな水滴が床や身体に容赦なく打ち付けるところに、外からも滝を思わせるほどの水が流入した。瞬く間に床の水位があがり、踝近くまで水に浸かるほどとなる。

フェイト達は安全圏からその様子を眺めた。最初はたちまち蒸発していた水も、炎の勢いを徐々に減じさせた。一旦、火勢が弱ると後は速かった。内部と外部からの水攻めにより、炎の勢いはたちまち衰え、そして鎮火していった。

先程までの熱気は数瞬のうちに放逐せられ、逆に寒く感ぜられるほどである。

黒煙も収まり、後は白煙だけが漂う。それもすぐに消えていった。

フェイトは不気味に輝く魔力結晶に近づいた。

「バルディッシュ」

主の言わんことを心得たかのように、バルディッシュは煌めく。

シーリングモードのバルディッシュを魔力結晶に近づけ、

「封印」

一気に強大な魔力を送り込む。魔力量を調整しつつ、封印の術式を唱える。相当に神経をすり減らす作業であった。

目を潰すほどの光が船倉内に一瞬溢れて、瞬く間に光が消えた。魔力素の残滓が蛍の光かのごとく、仄かな明かりを放っている。

巨大な魔力結晶の不気味な輝きは消えた。今はその魔力素の残光を反射させているだけである。一時的な封印処理であるが、ひとまずは安心であろう。

「ハラオウン執務官、負傷者の搬送が完了しました」

ロッド三尉が敬礼をしながら報告する。

「諒解、続いてこの魔力結晶を搬送します」

「諒解です」

局員達が結晶の廻収作業に入る。

フェイトは通信ウインドウを開いた。

「こちら、突入隊のハラオウンよりオスティアへ。負傷者の搬送と魔力結晶の封印が終了しました。また、火災の完全鎮火を確認」

『諒解』

とオペレータの声に続き、

『任務完了ご苦労、総員帰還せよ』

艦長ブラウアーの声が響いた。

フェイトは安堵の溜息を付き、ホロディスプレイを霧散せしめた。未だに雨を思わせる

ほどの放水が続いていた。

先の次元航行貨物船プリマス号の火災事件から一週間が経った

本局のオフィスをフェイトは書類作成に追われていた。言うまでもなく、プリマス号に関する報告書である。

プリマス号を所有する船舶会社には立ち入り検査がされることになった。プリマス号の火災がひどくなったのはスプリンクラーの不動作であるが、その原因は船齢五十年という老朽化した船体にも拘らず、定期的な保守点検を怠っていたことであった。

ただ、これはフェイトにとって瑣末な問題に過ぎない。後は海運局の領分である。フェイトが一番頭を悩ませているのは積荷の件である。

件の魔力結晶はロストログニアであると判明した。ランクは第四級。それほど危険なものではないが、相対的に見てのことである。それでも小さな町一つを焦土にできる。

この他にも、違法な積荷を運んでいたことが明らかになった。

魔導兵器である。

管理局の存在意義は「次元世界の安定」だ。それを達成するために安定を脅かす「ロス

トロギア」を管理し、「質量兵器」を根絶しようと日々邁進している。

それだけに管理局の仕事は留まらない。魔導兵器——例としてアルカンシエルが挙げられる——の適切な管理もその仕事のうちである。魔導兵器自体は違法ではない。だが、兵器の無秩序な拡散は次元世界の安定を損ねる可能性がある。

例えば、紛争を抱える管理世界への輸出などは禁止されているし、正規の輸出でも然るべき手続きを踏む必要があるのだ。

しかし、そのような規制を上手い具合に掻い潜って、反社会的な勢力は密輸といった非法な活動にも手を出しているのであった。

局の海と陸、それに協調する各世界の税関はこのような密輸に手を焼いているのが現状だ。たびたび密輸組織の摘発が行われるが、焼け石に水である。

溜息をつき、フェイトはモニターを見据える。

一人の男がモニターには映し出されている。年の頃は三十代前半だろう。

フェイトが見ているのは、ロベルト・オールヴィルのデータである。

ロストロギア・魔導兵器の密輸の仲介人である。数多くの密輸に関わってきたが、逮捕に至ったことはない。巧みに局の追跡から逃れているのだ。今回もこの密輸に関わっていたことが、積荷の輸元企業の聴取から明らかになっている。

「フェイトさん、先日に依頼されたオールヴィルの件ですが——」

フエイトのデスクに、副官たるシャリオ・フィニーノ執務官補がやって来た。

「シャリー、何か進展はあったの？」

フエイトの問いにシャリーは大きく頷く。

「はい、IRシステムにオールヴィルが引つかかったと、情報局から通報が。データを表  
示します」

新たなスクリーンが展開され、映像が流れ始める。映像が一旦停止し行き交う人波の中  
からオールヴィルがピックアップアップされる。

「昨日の午後七時三十分ごろ、ミッドチルダ第一次元港、アルファーターミナルの映像で  
す。九十パーセントの確率でオールヴィルと一致しました」

「次元港……。向かった先は？」

フエイトは顔を曇らせた。

「別の監視カメラの映像によりますと、第八十一管理世界に向かったと思われます」

そこはミッドチルダからは遠く管理局の影響がそれほど大きくはない世界だ。所謂辺境  
である。

「他に何かわかったことは？」

「いや、これ以上は……」

彼女は言葉を濁し、ばつが悪そうな顔をする。



「わかった。ありがとう」

彼女はデイスプレイを閉じた。

フェイトは徐おもむろに口を開いた。

「彼が行った目的は、ビジネスで間違いないね」

「それはそうですが」

フェイトは検索をして、当該世界の企業リストを出した。オールヴィルが扱う商品を欲しがる企業は数が限られる。適当に絞り込みを掛けると、僅かに十六社となる。

「この十六社を重点的に当たりますか」

「そうね——」

シャーリーが訊いても、フェイトは険しい顔のままだ。

「でも、彼らも架空企業での取引を行うから、ここを叩けばいいということにはならない」  
現地の捜査官がそういった情報に詳しい。

フェイトは少し黙考をし、やおら席を立った。

「シャーリー、ちよつと提督に掛け合ってくるね」

「第八十一管理世界へ？ プリマスのあれですか？」

オスティア艦長のブラウアー提督は太い声で言った。

「はい、プリマスの密輸に関わったオールヴィルがそこに向かったことが、情報局から知らされました」

フェイトはいつもより増して落ち着いた静かな声で返事をする。

ブラウアーはテーブルに肘を突いて言った。

「現地に駐留している捜査官に任せればいいだろう」

「第八十一管理世界における管理局の駐在人員は少ないですから、限界があります。ですが、今すぐ追えばオールヴィルをそこで捕まえることができます」

「確かに君には、向こうへ行つて捜査できる権限があるがね……」

ブラウアーはそう言葉を濁して黙り込む。執務官は所属する部隊における事件および法務案件の統括担当だ。この場合、プリマス号に関する事件として艦を降りて捜査に向かうことに問題はない。

ブラウアーとしては一々行くほどでもないだろうとは思ふ。だが、フェイトの様子を見る限りおとなしく引き下がる様子はなさそうだ。一途な所を見ていると兄のハラオウン提督の顔がブラウアーの脳裡（のうり）を過つた。

直立不動のフェイトをちら見し、腕を組んで唸る。

「わかった。船を降りることを認めよう。ただ、適当なところで終らせて、捜査の進展状況に拘らず、現地の人員に捜査を引き継がせろ」

それから苦笑する。

「君が抜けると、オステイアには大きな穴が開くんだよ。早く戻ってきてほしい」

「捜査許可、感謝します」

隙のない敬礼をフェイトを決めて、「失礼します」と言って、踵を返した。

部屋を出ようとしたところでフェイトはたと立ち尽くした。

「どうした？」

怪訝な顔で訊いた。

「いえ、何でもありません」

フェイトはしまったという顔をブラウアーに一瞬覗かせた。彼は敢て追求しないことにした。

フェイトが立ち去った後、ブラウアーは椅子に身体を委ねる。ぎしぎしと耳障りな音が響いた。

空中スクリーンを出す。表示するのは次元世界年鑑だ。登録されている次元世界の概要を集めた百科事典である。

「……第八十一管理世界、厄介なものだ」

フェイトがこれから向かわんとする世界の概要を閲覧して、ブラウアーは人知れず呟いた。

フェイトは喫茶スペースの一番奥まったところに坐っていた。

腕時計を気にしながら、少し早く来すぎたかなと首を傾げていると、図らずもなのは声が聞こえた。

「フェイトちゃん、お待たせ」

「そんなことはないよ」

本局で会うのは一週間ぶりである。なのは顔は妙に嬉しそうであった。フェイトは少し訝るも立ち上がり、喫茶スペースに置かれている自販機まで歩み寄った。

「なのは、何飲む？」

「自分で買うよ」

「いいの、いいの、これくらい奢るから」

フェイトの有無を言わさない態度に、なのはは多少戸惑う素振りを見せつつも、

「そう、ありがとうね——じゃあ、紅茶で」

フェイトはボタンを押して、カードをかざした。紙カップが落ちてきて、紅茶が淹れられる。

「熱いよ」と言いながら、それを渡した。フェイトも結局なのはと同じ紅茶を頼むことにした。

そして、奥まった席に相對するかのようになつた。

「そうそう、フェイトちゃん、またお手柄だね」

なのはが嬉々とした口調で言いながら、局内向けの週刊広報誌を見せてきた。

端末の画面にでかかど「燃え盛る船での救助劇」と題された記事がある。この記事は今朝方シャーリーにも見せられたものであり、先日のプリマス号での顛末をまとめたものであつた。広報部が妙に頑張つた成果でもある。

「お手柄だなんて、そんな。運が良かっただけだよ」

フェイトは顔を赤らめながら謙遜した。

實際、スプリンクラーの動作弁あたりまで炎が廻っていたら救助活動は数分遅れていたし、そうなれば要救助者はそのまま火あぶりになつていたであろう。

「いやいや、そのような運も実力のうち。幸運の女神がついていたんだよ」

フェイトはなのはこそ女神だよと心の中で独り突込み、少し俯いた。こういった話をするため、なのはを呼んだわけではない。

「あおう、それでね」

「うん、何かな？」

明るい笑顔を向けてくるのが、フェイトの心を容赦なく抉つた。

「今度の日曜日のことなんだけど」

なのは手をぽんと叩いて、

「あ、デートのこと？ フェイトちゃんに今回は一任するから、私に気にすることなく決めていいよ」

そういつた議題ではないんだと再び心の中で突込みを入れた。フェイトは覚悟を決めた。「そうなんだけど、日曜日、出張になったんだ」

捲くし立てるように言うと、不意に沈黙が訪れた。なのはの表情が強張ったことを認めると同時に、フェイトは動悸を覚えた。

「出張？」

なのはは不機嫌そうにその単語を言った。

フェイトは思わず視線を泳がせ、息を呑んだ。

夕食の時間帯を過ぎた後の本局の喫茶スペースで見られる人影はひどくまばらである。弛緩した雰囲気全体を覆っている。だが、なのはの一言で、この周りだけ終業後の和やかな雰囲気は跡形もなく吹っ飛んでしまった。冷たい空気がフェイトの首筋を纏わり始める。

これではいけないと思い、フェイトはなのはの顔を見据えた。いつに増して天使然とした笑顔であるが、目は笑っていない。相当に怒っているとき、決まってなのははこのような表情を見せるのであった。

「ごめんね、なのは」

再び謝罪の言葉を繰り返すと、そこで会話ははたと途切れた。片隅に置かれている喫茶マシーンのコンプレッサーの動作音が妙な響きを以て聞こえる。

フェイトはただひたすら頭を下げる一方、なのはは首を傾げて温くなり始めた紅茶を啜った。

「じゃあさ、デートはどうなるのかな」

少しドスを利かせた声である。

「ごめんなさい、次の機会に……」

「その台詞、前も聞いたんだけどなあ」

フェイトの表情がますます強張った。

なのはの言うとおりである。先月に予定せられていたはずであった。だが、フェイトの突然の出張で延期。そして、今回も出張で延期となったわけである。前回の出張は上司命令であるが、今回の出張は自分で申し出たものである。

廻避かひしようと思えばできたし、二度目の延期となつては流石のなのはも堪忍袋の尾が切れかけである。

出張を申し出た後に、その日がなのはのデートの日と被っていたことに気がついたものだから、もう救い様はない。

教導官という役職はそれなりに曆に準じた勤務体系であるが、執務官とう役職は曆を全く無視した勤務体系であるから、互いの休みを合わせるのは少々面倒である。

「本当にごめんなさい。埋め合わせはするから」

フェイトは臆面もなく土下座をした。そこには敏腕執務官の威厳はどこにもない。フェイトの同僚が近くを通りかかったが、一瞥しただけで只ならぬ雰囲気であることを察知して、逃げるように去って行った。

なのは再び紅茶を啜り、そして飲みきった。

「埋め合わせというけど、その台詞はこの前も聞いたよ？」

なのはの言うとおりであるし、言った後でこの台詞が失言だと気が附いたフェイトは全身で冷や汗を流していた。

フェイトはただただ土下座をしたままである。

「フェイトちゃん、ちゃんと坐って」

彼女を椅子に坐らせたところで、なのはは腕を組んだ。目の前には通夜を迎えんとするような表情を湛えたフェイトが坐っている。

「クリスマス」

なのはは独語するかのように言った。

フェイトは顔を上げて、





「……クリスマスまでに終らせろということ？」

「終らせられなくても、クリスマスには絶対に帰ってくることを」

そして、指切りをした。

「もし、クリスマスも不意にしたらね」

「したら？……」

「不意にしたら、フェイトちゃんのこと、もう知らないからね」

勘当を予告された。

フェイトはなのはの手を握り締めた。

正確にはミッドチルダにクリスマスという行事はない。ただの平日だ。だが、なのはとフェイトはミッドチルダに引っ越してからも、クリスマスなり正月なり、地球の強いて言えば日本の慣習に応じた祝い事を欠かしていない。

「ケーキを用意して待っているからね。約束だよ」

もちろん、このケーキはなのはの実家から取り寄せるものである。

「わかった。絶対に帰って来るからね」

追い込まれた。もう退路はなかった。

翌日、十二月六日の午前八時。フェイトは第一次元港のアルファターミナルにいた。向こうに駐在している捜査官の報告によると、オールヴィルは現地の地上本部がある都市に來たことが確認されている。

『お客様にお知らせいたします。ミッド・インターワールド・ラインズ六〇六便、第八十一世界「エルデ」行きに乗船手続きを開始いたします。ご乗船になられるお客様は八番ゲートへと——』

アナウンスが鳴り響いた。

「フェイトさん」

副官のシャーリーに促された。二人は発着場へと向かった。

発着場に停泊していたのは最新鋭の次元航行貨客船だ。アースラより一廻り小さいくらいである。徹底的に計算しつくされた美しい流線型の船体であった。

手続きを済まして、船に乗り込んだフェイト達は、指定座席に腰を下ろす。何となく外の窓を見遣る。管理局の広いドッグに見慣れていると、こここの発着場は妙に狭く感ずる。

「十四時間ですか。長いですね」

シャーリーが愚痴をこぼした。

「そうね」

十四時間坐り放しであるから、退屈なことこのうえない。

暇つぶしのための本を持ってきたが、睡眠にあててしまおうか。

局のオフィスと比べて坐り心地が良い。包み込むようだ。それを認識すると睡魔が襲ってきた。

軽い衝撃が船体を襲った。その衝撃でフェイトは目を覚ました。毛布が掛けられている。シャーリーが乗務員に頼んだものようだ。フェイトは隣に坐っているシャーリーを一瞥した。彼女はまだ夢の中にいるようだ。

「空」はあの紫色を基調としたさざ波模様から変化しつつあった。間もなく通常空間に出るのである。また、軽い衝撃が来ると予測すると、再び体に慣性が作用した。

さながらプラネタリウムのごとく、窓の外は満天の星空に切り替わった。眼下には蒼く輝く海原が見えた。第八十一管理世界、惑星エルデの高々度軌道に出たのだ。

『お客様にお知らせします。本船は無事、通常空間に出ました。間もなく、ポート・ウエルズに到着します。シートベルトがしっかりと閉まっているかどうかご確認ください』

そうであった。この船は途中で軌道上空の宇宙ステーションを経由するのであった。

窓の外を凝視していると、太陽光に照り輝く、その巨大な構造物が見えてきた。

巨大なリングがゆっくりと廻転している。だが、近附くにつれてその廻転はさらにゆっ

くりになり、やがてリングが静止しているように見えた。宇宙ステーションの廻転と同期を取った次元航行船は着実に近附いた。今や窓の外はその白色に煌めく指輪によって占められている。

やがて接近は止まった。ドッキング前の最後の調整であろうか。衝撃に備えていると、再びアナウンスが入った。

『本船は無事ポート・ウエルズへのドッキングに成功しました。間もなくゲートを開きます。降りられるお客様はご準備のほど、お願いします』

全くの無衝撃でドッキングに成功したのだ。恐ろしいまでの腕前である。

やがて、客の三分の一が降りて行った。彼らはここを起点にエルデの他の都市に赴くのである。

しばらくすると先程と降りた客の数とほぼ同数の客が乗り込んできた。乗船率を維持するために、地上と宇宙の往還シャトルも兼ねていることがわかる。

そして、船体が再び揺らいだかと思うと、リングが徐々に遠ざかって行った。宇宙空間に浮かぶ白銀のリングとともに、遙か先には衛星が見える。

再びシートベルトを締めよというアナウンスがなされた。これから大気圏突入のようだ。流石に高速度で大気圏突入であるからその衝撃を覚悟していたが、一般的な旅客機の離陸時程度の衝撃である。がたがたと機体が鳴動し続け、やがて衝撃は急激におさまった。

窓の外に目を凝らすも何も見えない。雲の中にいるためである。

シャーリーが目を覚ました。彼女は大きな欠伸をして、

「あ、おはようございます」

「よく寝ていたね」

「少々疲れ気味でしたから」

やがて、雲からも抜け出した。

眼下は一面黒かったが、所々に光の帯が列なっている。都市の明かりだ。陸地と海の区別は簡単についた。その帯の光量はだんだんと増していき、光の一つひとつが認識できるようになった。寶石を散りばめたかのような美しい夜景である。ただ、陸地の南東側であろうか、さながら虫食いのごとく明かりが点っていない区画が見られる。

『長らくの航海お疲れ様でございました。本船は間もなく、第八十一世界「エルデ」、新トヨハラ国際空港に着陸いたします。現地はただいま晴れ、現地時間は午後九時三十分、ミッドチルダ・クラナガンとの時差は一時間前となっております』

エルデには統一政府はない。複数の国家が未だ併存している世界であった。エルデの一国家たるイースタシアの首都トヨハラに、管理局の第八十一管理世界地上本部が置かれている。

フェイトは事前に仕入れた情報の中で復唱していく。

(この世界で一番特筆すべき点は——)

『着陸体勢に入ります。今一度シートベルトをご確認くださいませ——』  
フェイトは慌ててシートベルトを確認した。

入国ゲートでは行列ができていた。ミッドチルダ語とベルカ語と現地の共通語で「パスポートと入国カードをご用意ください」と丁寧に表示されていた。

入国審査官がフェイトからパスポートと入国カードを受け取った。そして、彼の動きは硬直し、そのカードを見て首を傾げた。

フェイトには一瞬審査官の行動が理解できず戸惑いを覚えたが、その視線に込められた敵意を感じた。どうやらこの係員は管理局を相当嫌っているらしい。あからさまにここまです敵意を出さなくても、という具合である。

そして、彼は突き返すようにパスポートを渡した。

「反管理局のきらいがあると聞いていましたが」

ゲートを抜けた後で、シャーリーが小声で言った。

フェイトもやや不愉快そうな面持ちで、

「それは聞いていたけどね」

実際にいきなりあからさまな態度を取られたのである。早々に嫌な思いをさせられた。

ゲートを出ると、管理局の制服を纏っている男が立っていた。

その男はフェイトを見つけると足早に近附いてきて声を掛けた。

「ハラオウン執務官ですね、第八十一管理世界、地上本部所属のヨハン・ランベルトです」

「フェイト・テストロツサ・ハラオウン執務官です。出迎えに感謝します」

附け加えるように、

「こちらは、副官のシャリオ・フィニーノ執務官補です」

場所が場所なら敬礼を決めるところであるが、握手で済ませた。フェイトは握手をしなから、彼の顔を窺った。繊細な雰囲気であるが、この地上本部で一番実績をあげている捜査官と聞いている。

彼女らは早々に挨拶を済ませ、空港併設の駐車場へと向かった。

高速道路を流れるように車は走る。

「捜査の状況はどうなっていますか」

助手席に坐っているフェイトが言った。

「……目立った進展はないですね。オールヴィルがこことヨハラに居るのは確かです。空港から地下鉄で都心へ向かったことが監視カメラの映像から明らかになっていますし、ただ、オールヴィルが単に潜伏しているだけなのか、あるいは本業に精を出しているのかは



不明です」

「どちらでも考えられますね」

「ただ、それ以外にも厄介な事件が昨日起きまして……」

口を濁した。

「厄介な？」

フェイトの顔がにわかには曇る。

「はい、魔力爆発です。比較的大規模な」

「魔力……爆発」

フェイトはぼつりと呟いた。

沈黙が訪れた。車のモーター音が妙に耳朶につく。

出口標識が見えてきた。

『直進…旧市街方面 右…出口五〇〇メートル』

ランベルトは迷わずハンドルを右に切る。

車はランプを通り、一般道に出た。そして、交叉点で一時停止。ランベルトが再び口を開く。

「詳しいことは本部に着いてから、いえ、明日でいいでしょう」

言い終わらないうちに信号が青に変わり、車は再び動き始めた。

フェイトは車窓の外へと視線を向ける。空は建ち並ぶビルで狭く見えたが、月が煌々と輝いていた。

地上本部のゲートを潜り、正面玄関前で車は停まった。

フェイトはその建物を仰ぎ見た。

五階建ての小さなビルであり、敷地は狭いものであった。一階ロビーはガラス張りが多用されており、解放感を演出している。ミラーガラスが月光を仄かに反射して煌めいている。

その世界に管理局がどれほどの影響力を保持しているかは、地上本部を見ればよい。都心に高層ビルを構えているような場合や郊外であっても広大な敷地を有する場合は、管理局の影響が強いということである。反対に小ぢんまりとした体裁であるということは、左程影響力はない現れである。

裏口から入る。事務棟と官舎は渡り廊下で繋がっているようだ。

ランベルトから鍵が渡された。

「ハラオウンさんは五〇一号室、フィニーノさんは五〇二号室です。細かい説明はもういいですよね」

「ええ、大丈夫です」

「それでは、また明日」

「はい、お休みなさい」

別れて部屋に向かう。

狭苦しい部屋だ。ミッドチルダにある自分のアパートメントの部屋よりやや狭い。一時的な滞在であるから文句は言っていられないであろう。

荷物をベッドに置いて、端末を確認した。メールが届いている。なのはからであった。思わず顔が緩んだ。

『フェイトちゃん、出張頑張つてね!』

一文だけの一見すれば素気ないものであるが、彼女にとってはこれだけで充分だ。音声通信をしようと思ったが、時差のことを思い出した。フェイトは時計に視線をやった。既に夜の十一時近く。今頃、クラナガンは短針が真上を指そうとしている。流石に寝た頃であらう。

ちようど宿舎に着いたころだよと返信だけをする。

欠伸。ずっと眠っていたのであるがまだ寝足りない。ここ最近の過労が祟っている。

寝る前にもう一度資料確認をしようかと思つたが、止めることにした。

着替えて備え付けのシャワー室へ。寝間着に着替えたところで、そのままベッドに潜り込んだ。